
トリップキャラバン

麗韻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップキャラバン

【Nコード】

N3233H

【作者名】

麗韻

【あらすじ】

『世界は数多にある。』そう思っている者は、いったい何人いるのだろう。この物語は、そんな数々の世界を巡っていくあるキャラバンの物語。「掘り出し物には御用心」そう書かれた店の品物を、あなたは買いますか？ 週一更新を目指しますが、一章終わるごとに商品考えなきゃいけないので、一章ごとに間隔があくと思います。
m () m 只今更新停滞中です

プロローグ『団長の日記』1ページ目

―ポカリポカ
―旅するキャラバンがやってくる
―リンリンリン
―鈴を鳴らしてやってくる
―彼らがめざすは桃源郷
―自分のための桃源郷
―ポカリポカリと馬の音
―鈴はいつしか無くなって
―いつかはきつとやってくる
―世界を旅するキャラバンの
―世界とともに滅ぶ日が

いえ唯の唄ですよ？

わたしは詩人ではありませんし、ほら吹きでもありません。
実際に実在する商隊なんです。

世界が滅びたらわたしたちも死んじゃうでしょ？

ほら。これじゃ、うそか本当か分からない。

だから死ぬのが終焉と共にってのは分かりませんがね。

ずるいですか？仕方無いじゃありませんか。

僕だって知りたいのに知れないまま死んでしまうんですから。

僕はこの世界に縛られたものなのだから・・・。

さて、この世界も滅びてしまいます。

そろそろ行ってください。

このままでは彼の二の舞になってしまふ。

それだけは避けますよ。

この鈴を使ってください。渡来都市にいきますから。
では、お元気で。

ーチリンチリン

鈴の音と共に馬車がやってくる。

その馬車には大量の鈴がついていた。

「そろそろ次に行きましょうよ。」

少女が退屈したようにいった。

「・・・そうだね。」

少年が答えた。

その声は意志が籠もってないかのように無機質だった。

「ー彼の世界を超え久遠の大地におりたたん。」

少年がそう唱えると、前方に黒い歪み appeared。

馬車が一台通れるくらいの大きなものだった。

その歪みをくぐり、少年たちを乗せた馬車はこの世界から消えた。

ただ歪みのあった場所に落ちていた独つ（ひとつ）の鈴のみが、馬車の存在を知ら

せるものとなって――

ブローグ『団長の日記』1ページ目（後書き）

お久しぶりです麗韻です。

知らない？すいません；；

初ファンタジーモノです。

拙い文章ですが、お付き合いいただけたらと思います。
感想とかあったら、やる気がググツと上昇します。

もし良かったらそちらもよろしくいお願いしまウス。

（　　^　　^　　^　　）　　y

予言の国 1

見渡すかぎり一面の草。

そんなところに突然、黒い歪みが現れた。

そのなかから出てきたのは、大量の鈴をつけた馬車。

それに乗っているのは赤毛の少女と黒髪の少年。

両方とも16歳なので少年、少女は不適切なのかもしれぬが、比較的容姿が幼いため、

少年、少女と呼ばせてもらおう。

「おお。見渡すかぎり草原ばかり!!」

少女が御者台から飛び降りていった。

「でもさ、街が無いんだけど。シヤムさ、どこ目指してとんだの？」
少女は飛び降りたばかりの御者台にむかって言う。

そこにはシヤムとよばれた少年が、馬を操っている姿があった。

速度は歩く早さとあまり変わらないので、降りても別に問題はない。

「……さあ？」

ちなみにこの少年あまり喋らない。

「ちよつと待つて……無計画ってこと？」

「……うん……まあ……」

喋りたくないわけではなく、必要以上に喋りたがらないだけで、話すのが嫌だとか、

そう言うわけではない。

「どうすんの街無かったら、昨日ので食材ゼロよ？食いつぱぐれるよ？」

「……狩ればいいんじゃないかな？」

草原ということは、草食の動物がいてもおかしくない、と少年は思っていた。

ただ、いま姿が見えないので夜行性の可能性が高かった。

「夜はそれでもいいかもだけどね、周り見てみな、なんつにもいな

い！！こんな

でなに狩るのさ、草か？草を狩るのか？」

「？・・・草は刈るんだよ？」

「そうだけでも！！いまはそれどこれじゃない！！いまからのご飯をどうすんのかつ

とこと。」

そこでため息をついて、シャムはいった。

「・・・夜までくらい我慢しなよ。ニユイ」

ニユイと呼ばれた少女は、ジャンプして御者台に飛び乗る。

その衝撃で、馬車は揺れを強くした。

そしてニユイは、打って変わってシュンとしたようすで言う。

「アタシ、昨日の夜ほとんど食べれなかったんだけど・・・。」
ギュルル〜。

そんな音がした。出所はめちろんニユイのお腹。

昨日、街道を歩いていた彼らは、夕飯中に盗賊に襲われたのだ。撃退できたのだがその際食料の類は全てなくなってしまった。

時間をずらして食事を取ったため、シャムは食べおわり、ニユイは食べはじめたところにやってきた盗賊に、ニユイは泣く泣く食べるのを止め、逃げたのだ。

「・・・・・・・・ニユイ寝てなよ。」

「うん・・・そうする。」

その前の昼も逃していたニユイは、

あまりの空腹にそのまま馬車の中に入って寝てしまった。

寝るまでお腹が鳴ってしまっていたのは、可哀相だから無視してあげよう。とシャムは黙々と手綱を操っていた。

予言の国 1 (後書き)

短めなんです
が短すぎでしょうか・・・？

ニユイが目を覚ました。

辺りはすでに真っ暗。

ニユイはどうやら朝から夜まで寝てしまったようだ。

ただ目を覚ましたのはその所為ではない。

外から肉を焼くような音と、そのいい薫りが漂ってきたからだ。

ニユイは慌てて馬車の戸を開けると、そこには肉にかぶりつくシャムがいて、そ

の隣には火に焼かれている肉があった。

「肉ううう!!」

無理もない。寝ていたとはいえ、かれこれ半日は何も食べていないんだし。と、

シャムは思った。

ただ、女の子だよね？

という疑問は残ったが。

いつのまにかニユイは、シャムの食べていた肉を奪い取って食べた。

「あつ!!・・・ちよつと。」

「はむっ・・・もぐ・・・んぐつ。いいじゃない!!こっちは全然食べてないんだ

から!!」

「・・・まあ・・・いいけどさ、がつつくと喉詰まるよ?」

「ううあい!!(うるさい!!)」

そう言われたシャムは、肩をすくめて肉を焼くことに専念した。

(ちよつと待った・・・さっきこれシャムが食べてた・・・ってことは・・・!?か・

・かん・・・)

「んんん!!!!・・・けほっ・・・ふう。」

「・・・大丈夫？」

「大丈夫！！た・・・た、ただむせただけだから！！」

「・・・・・・？」

腹の虫が治まったニユイが、あとで真っ赤になっていたのだが、シヤムは気のせいだと思っただけだ。

「グルルルル・・・」

「・・・ん？」

夜行性なのは、草食だけではない。

食料が夜に出てくるのならば、捕食者も夜に出てくるのだ。

今回、現われたのは、狼のような生物なのだが・・・

「で、でかい・・・」のである。

高さが人の身長程もある。

立ち上がったら倍くらいではないだろうか・・・。

シヤムの行動は速かった。「・・・タイプ大盾」

そう呟くと手足の袖から銀色の物体が飛び出してきて、右手に収束。あつという間に大きな盾の形になった。

その盾を構えて突っ込み、盾を思いつきりぶつけて、狼を気絶させた。

「・・・相変わらず早いわあんた。」

自分が呆然としている間に倒された獣を見て、ニユイは呆れたように言っただけだ。

「これって魔物？」

ニユイがそう問うと、シヤムは首を横に振って否定した。

「じゃあこれただの狼？・・・ってあんたちよつとくらい喋りなさい！！」

そう言っただけでシヤムにチョップをいれるニユイ。

「痛っ・・・。」

ヒットしたことに一言、殴られたより恨みに質問は無視する。

―細やかな復讐。これがシャムクオリティーなのである。

「ねえ……。」

「……。」

「質問に答えろ――！」

「……。」

「……ちよつと……。」

「……。」

「あう……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「殴つてすいません質問に答えてください。」

「……わかんない……。」

「はぁ！？こんだけ引つ張つといてわかんないの！？」

「……。」

「……ごめんなさい。」

「……多分だけど、獣が魔法で巨大化しただけだと思う。」

「へえ……。（初めからそう言ってくればいいのに）」

「……？」

「なんでもないわ。」

2 (後書き)

「短すぎる!!」と感じた方はご一報ください・・・?

二人は馬車から降り、ある一点を見つめていた。

「ここ・・・街道・・・だね?」

「・・・そのはず・・・」

二人はようやく道に出ることができた。

「何でこんなボロボロなの?」

しかし道といっても、ただでこぼこした石畳が続く何とも荒廃した道だった。

「・・・もしかして・・・潰れてる?」

「なにが?」

「・・・近くの街・・・」

「まさか・・・」

「・・・これだよ?」

そういつてシヤムは道を指差す。

「・・・たしかに、じゃあ翔ぶ?」

「・・・ダメ・・・翔ぶには売らないと。」

「なにそれ? エゴ?」

「・・・いや、発動条件。」

「なんてこった・・・」

がつくりと膝をつくニユイ。

「・・・どんまい。」

シヤムは、ぼんぼんとニユイの肩を叩いた。

「こっからさきどうすんのよ? いっても廃墟じゃ意味ないじゃん。」

「・・・そこから道があるかもしれないから。」

「そっか!! ならちやっちやと行こう!!」

そういつてニユイはダッシュで走っていった。

「はやくね?・・・まあ、ニユイだし仕方ないかな。」

そうシヤムは独りごちた。

「はーやーくー!!」

遠くからニユイが叫ぶのが聞こえ、シャムは少しだけ笑った。

「・・・お疲れ様。」

ニユイが疲れてへばったところを捕獲して馬車に乗せたシャムは、言った。

「はぁ・・・はぁ・・・う・・・うるさ・・・い・・・。」

息を切らしながらニユイは言う。

「はははははっ!!おまえらおもしろいな。」

いつの間にか乗っていた男にニユイは顔をしかめる。

知らない人に、突然笑われたのだ。

無理もないだろう。

「あなた・・・なんでいるんですか?」

ニユイの声は低かった。

「・・・街まで案内してくれるって。」

そんなシャムの説明に、男は補足する。

「馬車に乗せてもらう代わりに道を案内するって俺がいったのさ。」

「そうですか。では、短い間宜しくお願いしますね。」

「おう、こちらこそヨロシク。」

ニユイには、シャムがなぜこの男に乗せたのかわからなかった。

実際のところ、シャムと旅をするのは今回が初めてだ。だが、それ

でもシャムがこんなにも簡単に商品のある馬車に近付けたことが、

ニユイには意外だった。

「・・・契約は、護る事。」

いままで黙っていたシャムが口を開いた。

「わかってら、はぁ。俺なんだか、邪険にされてない?」

「わかっているなら聞かないでください。」

「ひどっ!!」

ニユイの毒舌によよと泣き崩れる男。

「えっ・・・えっ？」

その泣き真似が真に迫っていたわけではないが、
なんというか、ニユイは騙されやすい気質なのだ。
純粹に育った、と言うべきなのか。

「ちよっ・・・大丈夫ですか？泣かないでくださいよ。」

パニック状態でも背中をさすってくれるニユイに、罪悪感が募り、
男は普通ならばそれ程な嘘を突き通すはめになった。

「・・・だ、大丈夫だから。もう、もう大丈夫。」

「本当に？」

「・・・おう。」

「本当の本当に？」

「そうだって。」

そんな寸劇を繰り返す二人を見て、シャムは独りばれないように笑っていたとか。

3 (後書き)

すいあせん、日をまたぎました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233h/>

トリップキャラバン

2010年10月16日00時36分発行